

1. はじめに

カラー・キー・プログラムという色彩調和の理論がある。

図1のように、5色相の中央の色(N)、つまりもっとも赤らしい赤、黄色らしい黄色などを想定すると、それより暖かい感じの赤や黄（オレンジがかった赤や黄）と冷たい感じの赤や黄（紫がかった赤や黄緑がかった黄）が存在する。このように、5色相を考えたとき、同色相の範囲で色相を代表する典型的な色より暖かみのある色が warm color(W) であり、冷たさを感じさせる色が cool color(C) ということになる。カラー・キー・プログラムとは、warm color どうし、cool color どうしは調和するという考え方である。

WW の組み合わせはWC の組み合わせより調和するのかというように、warm color, cool color の分類が調和と関連するかどうかを確かめる実験を行った。

2. 実験概要

実験は3つ行った。実験1は2色配色、実験2は3色配色、実験3は3色配色（インテリア画像）である。

まず、図2に示す26色相6トーンの色チップから色を選んで、warm color, cool color の組み合わせを変化させたサンプルを作成した。

実験1では、同系色相・同トーン、異色相・同トーン、異色相・異トーン、同系色相・異トーンの配色を組み合わせたものを240枚作成した。

実験2は同系色相内から、(R&Y)とYR・B・P・Whの組み合わせを2種類のトーン (lt&ltgt&p, s&dk&p) で170枚作成した。

実験3はドア・床・壁のインテリア画像に実験2の使用色を当てはめて70枚作成した。

サンプルはA4用紙に印刷し、被験者には昼白色色評価用蛍光灯のもとで、配色の好ましさを7段階のSD尺度で評価してもらった。

3. 結果

3-1. 実験1

評価サンプルごとの分散のばらつきが大きいため、クラスター分析で被験者を3つのクラスターに分割した。C1は、C2・C3よりもpトーンどうしの配色の組み合わせを好み、C2はC3より同系色相の配色の組み合わせを好み、C3はP&Y、B&Y、G&Bなど、異色相の配色を好んだ。

WW, NN, CCの組み合わせがWN, WC, NCの組み合わせよりも評価が高いという結果は、どのクラスターでも得られなかった。

3-2. 実験2

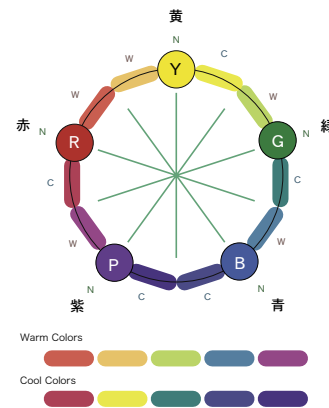


図1 warm color と cool color

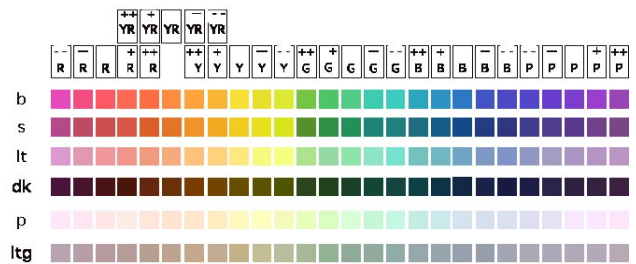


図2 カラーチップ

評価サンプルごとの分散の平均が大きいので、クラスター分析を行い、3つのクラスターに分割した。C1はlt&ltgt&pのサンプルを相対的に好み、C2は暖色系のs&dk&pのサンプルを相対的に好んだ。C3は相対的にs&dk&pのサンプルを好んだ。

実験2でも、W,N,C どれかに統一した組み合わせが、W,N,Cをミックスした組み合わせよりも評価が高いというような結果は得られなかった。

3-3. 実験3

実験3はサンプルごとの分散がやや小さかったので、平均値で解析を行った。暖色系の組み合わせは評価が高く、Y内や(R&Y)&B・Pの組み合わせの評価は低かった。

4. まとめ

今回の実験では、カラー・キー・プログラムの理論のような結果にはならなかった。

配色の好みは個人差が大きいため、いくつかのグループに分けて考えるべきである。そのグループの違いには構成色のトーンに対する好みの違いや、色相の統一性が関連しているであろう。